

2020年度  
共生の芸術祭

距離  
↓

みちのり

2020 The Symbiosis Art Festival  
‘The Way of Distance’

## 2020 年度 共生の芸術祭

### 「距離のみちのり」

会期：2020 年 11 月 11 日（水） - 11 月 15 日（日）

時間：10:00-18:00

会場：京都文化博物館 別館ホール

出展作家

鎌倉あけみ、瀬尾ひろみ、廣川照章、南秀夫、吉田格也

料金：無料

主催：きょうと障害者文化芸術推進機構、art space co-jin

企画担当：寺岡海（art space co-jin）

会場構成：dot architects、NEWDOMAIN

広報デザイン：タナカタツヤ

協力：

みずなぎ学園みずなぎ鹿原学園

アートセンター画楽

NPO 法人わくわく

ボーダレスアートミュージアム NO-MA

## 瀬尾ひろみ 出品作品リスト

(※左図、矢印の順に記載)

ごあいさつ

きょうと障害者文化芸術推進機構では、2020年度 共生の芸術祭「距離のみちのり」を開催いたします。新型コロナウイルスの影響によって、他者との「距離」について考える機会が増えました。それは他者との適切な距離を保つことに始まり、遠くにいる、あるいは未だ知らぬ他者を想うことでもありました。新しい価値観、生活様式、かつてない困難。変わりゆくこの時代の中、私たちは解決しがたい問題に直面したとき、その問題に対してどのように向き合うことができるのでしょうか。

例えば、自分を点A、立ち現れた問題を点Bとした時、その二点を「距離」のようにまっすぐ進むことができれば、問題解決のためには一番効率のよい方法なのかもしれません。しかし、こと現実においてはその間に複雑な問題を孕んでおり、まっすぐにそこまで向かうことはできないでしょう。回り道をする必要があるかもしれない、一度休む必要あるかもしれない。目的地まで道は続いているのか、そもそも目的地はどこなのか。そのような複雑な現実の状況の中で選び取られる「みちのり」は他者から見れば非効率的で、難解で、不思議なものに映るかもしれません。しかし、そこには自らが選んだ、そして自身と世界の間にある「距離」によって、その人独自の「みちのり」が生まれることでしょう。

本展覧会では、5名の作家に「距離」と「みちのり」という焦点を当て、この世界に対する向き合い方を考察します。天体や光学の知識を元に絵を描く南秀夫。どこにもつながっていない黒電話に話しかける鎌倉あけみ。自室でテープを巻いたダンボールを積み上げ続ける廣川照章。天国までの階段を作り続ける吉田格也。人の間にある距離を描き出すように絵を描き続けた瀬尾ひろみ。それぞれにとって切り離すことのできない問題が立ち現れ、それが現実において真摯に向き合われる時、それは一つの表現となり、共に生きることの難しさと強さを私たちに教えてくれるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、本展覧会開催にご協力いただきました各作家の皆様、並びにご親族、各施設の皆様方には謹んでお礼申し上げます。

きょうと障害者文化芸術推進機構

### A (テーブル上)

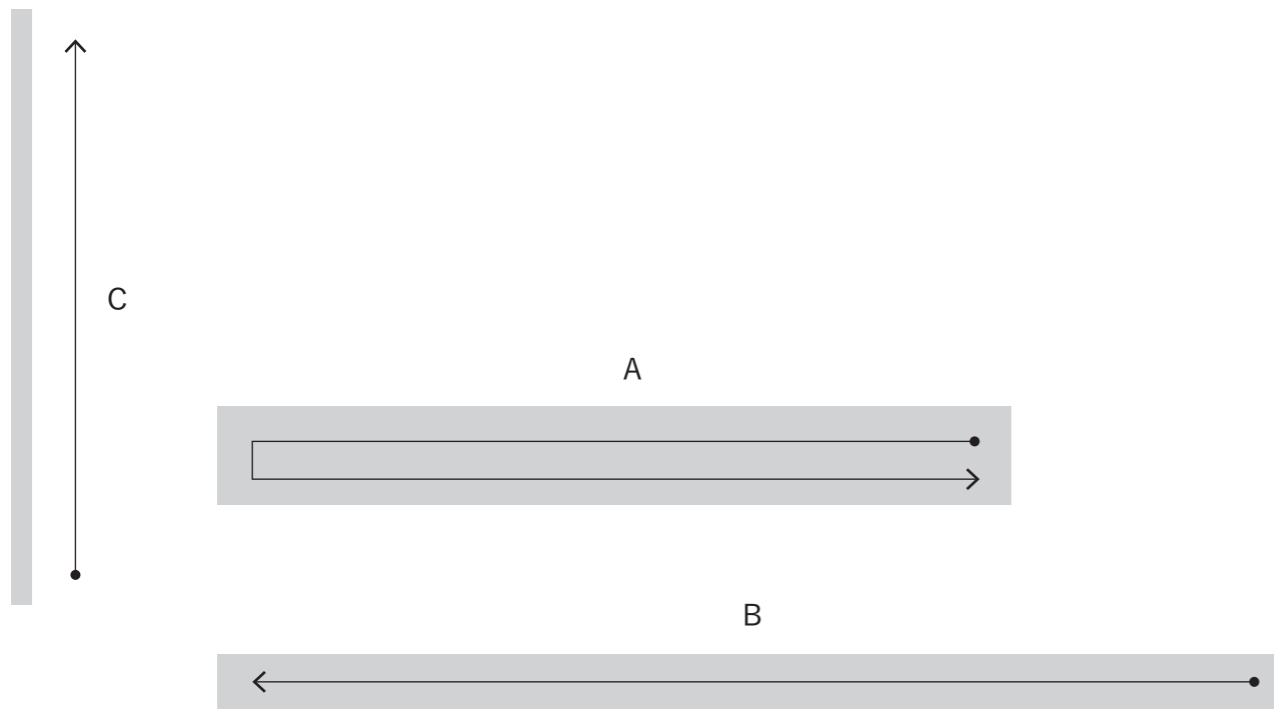
- 《私はおどっている》制作年不明
- 《くまさん》制作年不明
- 《フォークだんす》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《いぬ》制作年不明
- 《さる人げん》2004
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《2人》制作年不明
- 《おともだち》制作年不明
- 《どうぶつえん》2009
- 《おんせん》制作年不明
- 《ヘイかのじょ》制作年不明
- 《ロングしょうじょ》制作年不明
- 《サッカー》制作年不明
- 《おどり》制作年不明
- 《すいぎゅう》制作年不明
- 《さるとうさぎ》制作年不明
- 《キリン》制作年不明
- 《いちりんの花》制作年不明
- 《ワルツ》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《かげのみえないおつきさま》2006
- 《ロングヘアのおんな》制作年不明
- 《ふじさん》2006
- 《どうぶつえん》制作年不明
- 《ひこうきをもつ人》2006
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《ねずみのしゃぼんだま》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《どらいぶ いゆこ》制作年不明
- 《うちゅう人》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明
- 《カエル》制作年不明
- 《くま》制作年不明
- 《くりすます》制作年不明
- 《かめ》制作年不明

### B (カウンター上)

- 《わんぱたあん》制作年不明
- 《ドーナツ村の人々》制作年不明
- 《タヌキとたわむれ》制作年不明
- 《こすもすかいどう》制作年不明
- 《Untitled》制作年不明
- 《Untitled》制作年不明
- 《人 にわとり》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明

### C (壁面)

- 《ハデナイショウをきた女》制作年不明
- 《がいじん》制作年不明
- 《なつふく》制作年不明
- 《おともだち》制作年不明
- タイトル不明 | 制作年不明



**瀬尾ひろみ**  
**SEO Hiromi**

1959-2010 (享年 51 歳)  
長野県出身

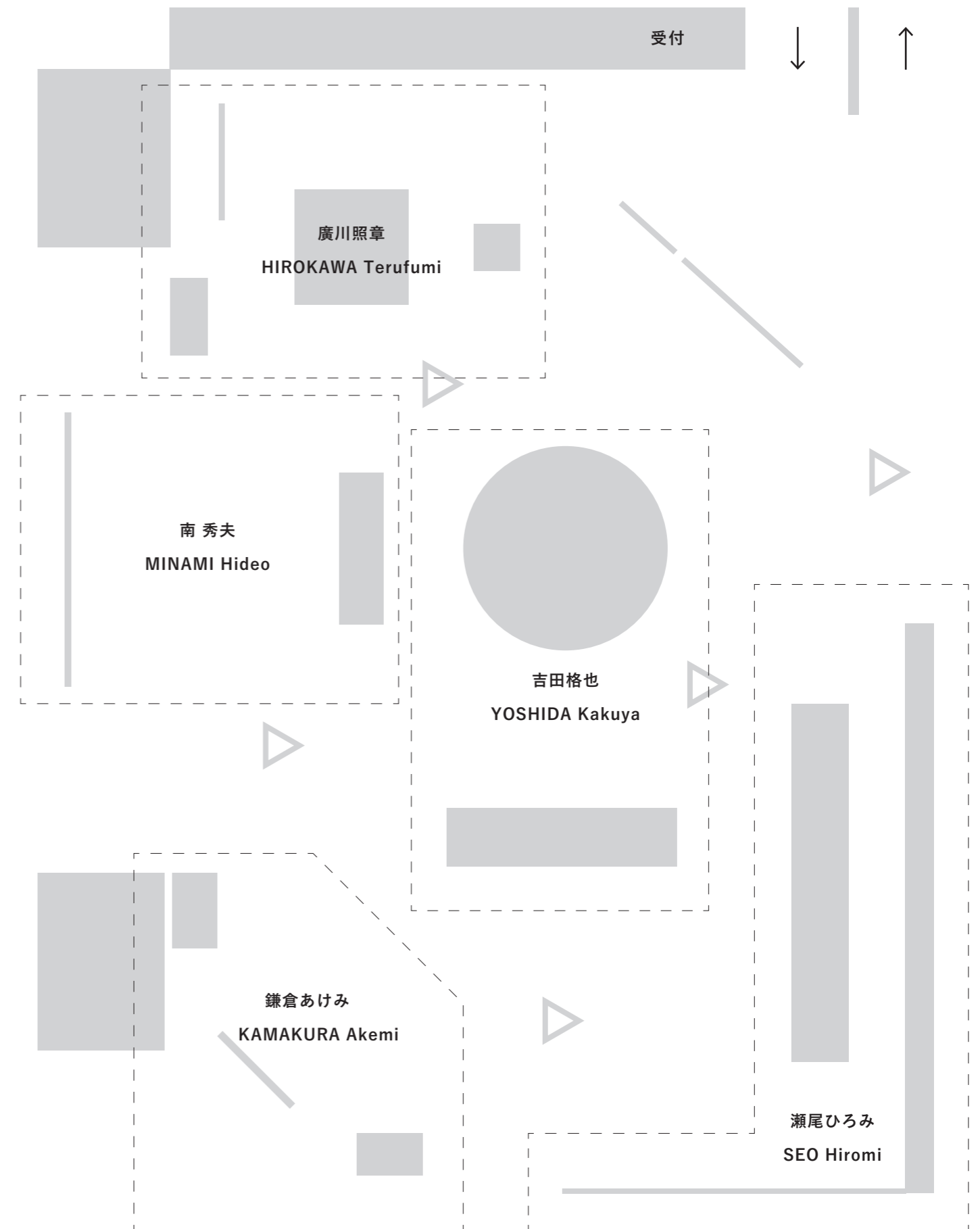
2010 年、彼女はこの世を去った。  
彼女が見た世界はどのようなものだったのだろう。

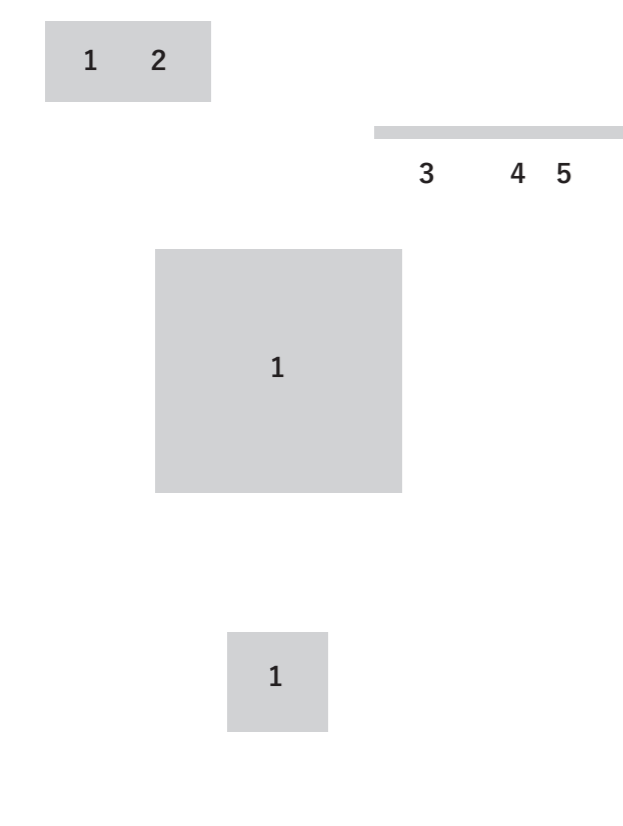
数人の人物、動物、不思議な生き物たち。ボールペンによって描かれた瀬尾ひろみの絵は、歪んだような背景の塗りが相まって、どこかこの世界とは別の世界の出来事が描かれているようにも思える。そこで暮らす彼らは、不思議な関係を持ちながらその世界を楽しんでいるようだ。

「おともだち」(※フライヤー掲載作品)と題された作品には、三人の人物が描かれているが、三者の視線が交わることはなく、彼らの間にどのような関係性があるのか見る者は考えずにはいられない。それを読み解く要素として、人物の距離や、表情、色、配置、遠近などが挙げられるが、中でも人の描かれていない空間、いわゆる背景の描きこみが大きな役割を果たしているだろう。歪んだ線によって描かれた背景は、人物に干渉しながら画面全体を満たしている。それはこの三者の関係によって漂う「空気」のようなものを描き出しており、複雑な関係性を複雑なまま可視化しているようでもある。

右側の人物は私たちに視線を投げかけている。それによって、私たちがこの現場に居合わせた四人目の「おともだち」となり、「あなたはどう思う?」と問いかけているようだ。

彼女亡き今、私たちは彼女の見た世界を絵を通じて想像することしかできない。それは答えのない、果てしないものかもしれないが、だからこそこの世界と同様に想像や可能性が開かれている。本展覧会ではご遺族のご協力により、瀬尾の作品を 80 点近く展示することができた。この機会にぜひ彼女の見た世界に触れ、想像を膨らませていただきたい。





## 廣川照章 HIROKAWA Terufumi

1965-  
京都府在住

2016年より「NPO法人わくわく」が運営するグループホームでの暮らしを、100個の「箱」と共に始めた。かつて住んでいた実家には膨大な量の「箱」が積まれていたが、引越しのトラックに乗せることができたのは、そのうちの100個ほどだった。

入居後も「箱」の制作は続き1日1個のペースで生み出され、自室のみならず共有スペースにも積み上がり、日ごと増え続けている。

増え続ける「箱」に、グループホームとしては困惑しているが、廣川にとって「箱」は、大切なものとして確かな執着がある。入居からしばらくして、「箱」があまりにも生活空間を圧迫していたため、見かねたスタッフが減らすように説得をしたところ、廣川は「命よりも大切」な旨を伝えてきた。以来、廣川の意思を尊重しながら共存の道を探求している。

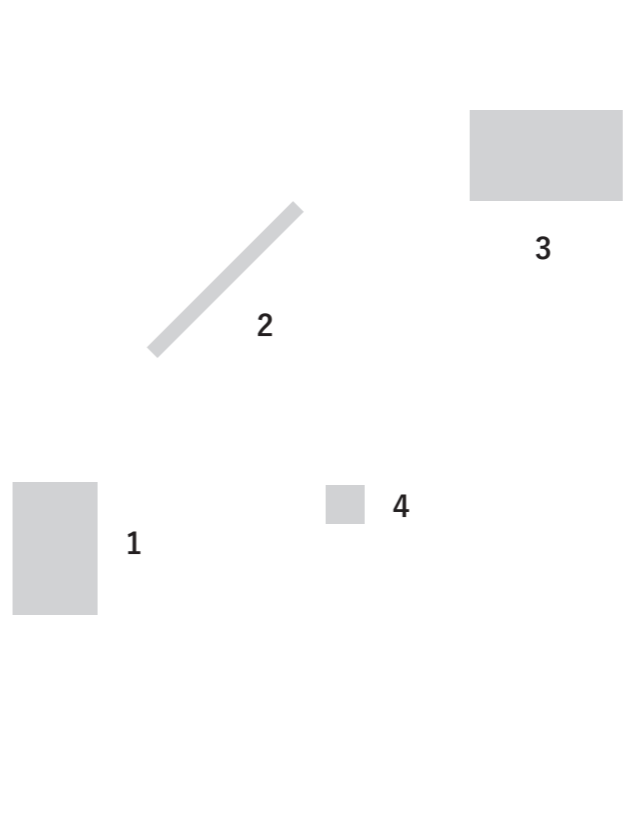
「箱」の制作は自室に鍵をかけ、見せず語らず進められているため、どのように「箱」を制作しているのか、中に何が入っているのか、明確ではない。持ち上げてみると、軽く何も入っていないようなものもあれば、ずっしりと重たいもの、振ると音がするものもある。

今回の展示にあたり、ひと箱だけ開ける許可を頂いた。重たい箱に入っていたのはシュレッダーで細断処理されたかのような紙の塊だった。それは廣川自身がハサミで細かく刻んだものだと言った。

他に、今回展示している日記は、日常を記録したとりとめのないものだが、同じ文章を多いもので200回以上も繰り返し綴られている。そこに心象的な言葉は見当たらないが、反復されることで、廣川にとっての大切なものへと転換されていく。

廣川の「箱」はいつから何がきっかけで作り始めたのか、作り続ける理由も明らかにはならないまま、語らない彼の前で日々積み増え続けていく。そんな「命よりも大切なもの」へ私たちはどのような「大切さ」をもって問いかけ、向き合うことができるのだろうか。

- 《箱》  
制作年不明  
素材：段ボール、クラフトテープ、ほか
- 《日記》  
制作年不明  
素材：ノート、ボールペン
- 資料写真 1  
撮影：2016年7月  
資料提供：NPO法人わくわく  
2016年まで住んでいた実家。一階の広いスペースに500個ほどの《箱》が積み上がっていた。
- 資料写真 2  
撮影：2020年9月（art spac co-jin）  
完成した《箱》は、廣川の住むグループホーム内の共有スペースである世話人室へ積み上げている。空のものもあるが、中身が入っているものもある。
- 中原耕氏 インタビュー  
（グループホームわくわく 管理者）



## 鎌倉あけみ KAMAKURA Akemi

1964-  
高知県在住

所属：アートセンター画楽

鎌倉とパフォーマンスの出会いは「アートセンター画楽」で新しい画材と技術の出会いを目的とした、月1回のアートワークショップの中である。2012年、「桃太郎」を題材としたお芝居ワークショップの中で、電話の効果音に反応し受話器を取ったことがきっかけとなり、黒電話を使ったパフォーマンスを定期的に行う。しだいに周囲の注目を浴びようになり、2018年には作品として発表するに至った。

黒電話のコードはどこにも繋がっていない。wifiや5G、そんな無線の機能はもちろんない。にもかかわらず、受話器を手にとると鎌倉は淀みなく喋り出す。しっかりと受話器に耳を当て、相手の話を聞くような間合や、相槌もある。訛りの強い口調で、抑揚をつけながら会話が進んで行く。内容はその時々によるが、多くの場合、今は離れて暮らしている母に宛てたものである。聞き慣れない方言やアクセントのため、地元で縁がないものには会話内容の理解が難しいかもしれない。しかし、電話越しの会話という日常の動作から、鎌倉自身の人柄や見えない通話相手の姿がおぼろげに形作られ、次第に私たちとの新しい関係が形成される。

鎌倉のパフォーマンスは、繋がらない電話を介して、受話器の向こう側と、周囲の鑑賞者との距離も縮めてしまうようである。

展示されている映像は3点。1つは「四国素展」(高知/2018)で上映された、鎌倉の普段の活動とパフォーマンスを撮影した「電話」(撮影・編集 藤井彩加)、2つ目は同展内でのパフォーマンス記録「鎌倉あけみ de んわ show」(2018)、そして鎌倉が所属しているアートセンター画楽でのお芝居ワークショップ記録「なんでくさっちゃうが」(2018)である。

- 《鎌倉あけみ de んわ show》  
2分37秒  
2018  
「四国素展～芸術資本宣言～“Resources” case1. 見えない生き物」でのパフォーマンス映像
- 《電話》  
5分48秒  
2018  
撮影・編集：藤井彩加  
「四国素展～芸術資本宣言～“Resources” case1. 見えない生き物」にて会場展示された映像作品
- 《鎌倉あけみ de んわ show》  
2分37秒  
2018  
「四国素展～芸術資本宣言～“Resources” case1. 見えない生き物」でのパフォーマンス映像
- 電話